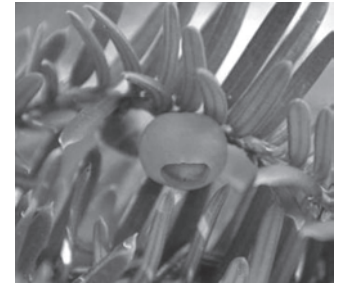


コラム 緑化植物 ど・こ・ま・で・き・わ・め・る

イチイ (*Taxus cuspidata* Sieb. et Zucc.)

渡邊仁志 (岐阜県森林研究所)

wTaxus@gmail.com, watanabe-hitoshi@rd.pref.gifu.jp



イチイは日本やアジア東北部の寒冷地に分布する常緑針葉樹で、成木は樹高15~20m、直径約1mに達する³⁾。林内では亜高木または低木として他種の下木になることが多い。イチイは耐陰性が高く、成長が遅く、枝葉が密につく¹⁾ため、生垣や庭園木に適している。岐阜県飛騨地方の旧家には手入れされたイチイの生垣があり、地域景観には欠かせない要素になっている。また庭園木としては北海道大学や旧道庁・赤れんが庁舎の庭にあるものが印象深い。材は緻密でかたく光沢があるため、彫刻、床柱、天井板などに使われ³⁾、岐阜県や岐阜県高山市など30以上の自治体の木にも指定されている。昔、この材で貴人の笏(しゃく)を作ったので、位階の「一位」にちなんで名付けられた³⁾由緒正しい植物である。

イチイは雌雄異株で花期は3~5月、雄花、雌花とも淡黄色または淡緑色^{3,4)}で、小さく目立たない。岐阜県内で観察した例では、結実にはやや豊凶があるように見受けられる。種子は当年の10月頃に熟し、長さ約5mmの卵状球形で、先端に突起があり^{3,4)}、ちょうどドングリを小さくしたような形である。成熟した仮種皮は紅色液質になり、種子の頭頂部以外を包みこむ³⁾。この仮種皮は、ほのかな甘みがあり食べられるが、そのほかの部分には種子を含め有毒である。この性質から想像できるように、種子の散布形式は動物による被食散布である¹⁾。加えてヤマガラ (*Parus varius* Temminck et Schlegel) などによる貯食も種子散布に一役買っている²⁾。種子は硬実性を持ち、大部分が2~3年目の春に発芽す

る^{1,4)}。発芽率は20~40%程度、発芽促進処理としては土中埋蔵が簡便で効果が高い^{1,4)}。成長が遅く30~50cm実生苗を作るには5~6年を要する¹⁾。

このようにイチイの成長は万事マイペースであり、耐陰性が高いため暗い林床でゆっくりと生育すると考えられる。ただし、筆者らの観察によると、実生はイチイ林下にはなく、隣接するスギ林だけにみられた。さしものイチイも親の下では暗すぎるのであろう。

イチイと筆者との関わりは、一位一刀彫の原材料問題にはじまる。一位一刀彫は、岐阜県飛騨地方で作られる国指定の伝統的工芸品である。原材料を天然のイチイに依存しており、その枯渇が深刻である。そのうえ、必要な形質は「年輪幅1mm以下、直径30cm以上の通直・無節材⁵⁾」であり、これにしたがえば、収穫までにはどれだけ急いでも150年以上かかる(林業では80年以上を長伐期というが、それを遥かに超えている)。直径成長と緻密な年輪とは相反する関係にある。したがって、一位一刀彫の原材料を生産する場合、ただ大径木を目指すのではなく、同時に必要以上に太くならないよう直径成長をコントロールする必要がある。他樹種とイチイとの二段林(または混交林)における調査の結果、樹冠サイズ(樹冠長や樹冠幅など)が大きい個体は直径も大きいこと、樹冠サイズの差は、被圧する上木の有無やその種類(常緑針葉樹か落葉広葉樹か)に起因する⁵⁾ことが分かった。上木の樹種や配置を工夫し、イチイの樹冠サイズを制御すれば、直径成長が調整できると推測される。これまでにイチイの人工林管理に関する知見はほとんどない。非常に気の長い話ではあるが、時間がかかるからこそ早急な対策が望まれる。

引用文献

- 1) 斎藤真一郎(1986) オンコ, 北海道新聞社, 237 pp.
- 2) 榊原茂樹(1989) イチイの種子散布におけるヤマガラの役割, 日本林学会誌, 71: 41-49.
- 3) 佐竹義輔ほか(1989) 日本の野生植物, 木本I, 平凡社, 321 pp.
- 4) 佐藤孝夫・久保田康則(1981) イチイ属, 浅川澄彦ほか編, 日本の樹木種子(針葉樹編), 林木育種協会, pp. 6-10.
- 5) 渡邊仁志・田中伸治・大洞智宏(2012) 高齢ヒノキ・イチイ人工林における胸高直径と樹冠構造の関係, 中部森林研究, 60: 1-4.



写真-1 蔵柱のイチイ巨木群(岐阜県高山市)のイチイ。イチイの大木はスケール感が狂う(左)。心辺材の色差をうまく利用して製作された一位一刀彫のふくろう(右)



写真-2 イチイの雄花（左）と雌花（右）



写真-3 たわわに実ったイチイの実



写真-4 イチイの2年生実生苗。播種から発芽までに丸1年かかった



写真-5 スギ人工林下のイチイ実生。スケールを当てている個体のほか、右下にも小さな個体があり、種子散布が継続的に行われていると考えられる。隣接するイチイ人工林下には実生の定着はみられなかった



写真-6 約40年生イチイ人工林。イチイ材の安定確保に向け、一位一刀彫に関連する「川上から川下まで」の関係者が会した情報交換が行われた。写真は現地検討会の様子



写真-7 約90年生ヒノキ-イチイ人工林。イチイの最大直径は30cm以上で、平均年輪幅は目標値を超過していた。太りすぎてはいけないという、身につまされる話である



写真-8 イチイの生垣。岐阜県飛騨地方には手入れされた生垣がみられる

〔無印：岐阜県郡上市（2012.9） 1左：岐阜県高山市（2012.9） 2左：岐阜県郡上市（2014.4） 2右：岐阜県中津川市（2014.4） 3：岐阜県高山市（2012.11） 4：岐阜県美濃市（2014.4） 5：岐阜県高山市（2012.10） 6：岐阜県高山市（2013.8） 7：岐阜県高山市（2010.11） 8：岐阜県高山市（2014.4）〕